

小学校説明的文章教材に見られる 生きる「知恵」の研究

学籍番号 249319

氏 名 栗 真 人

主指導教員 土山和久

副指導教員 畠山久子

1. 研究の背景と目的

本研究に取り組もうと考えるようになった背景には、基本学校実習において教材研究が不十分であったため、教材の特性に即した授業づくりができなかった経験がある。この経験から、教材文を深く読み取り、それを授業の中でどのように生かすかを考える教材研究力の重要性を意識するようになった。その後、現職教員の研究会への参加を通して、説明的文章を内容理解の対象としてのみ扱うのではなく、子どもが読み物として楽しみ、心を動かされるような側面をもつ教材として捉える視点に出会った。そして小学校で扱われる説明的文章の多くが動物や植物、人間が生き延びよう、よりよく生きようとする姿を描いた「科学的読み物」としての性格をもつことに着目するようになった。こうした姿は、生きるために編み出されてきた工夫や在り方、すなわち生きる「知恵」として捉えることができる。教材に描かれたこのような生きる「知恵」に触れることは、児童が教材を自分ごととして捉え、生き方を考えるきっかけとなり、国語科の学びの中で「生きる力」を育てることの手がかりになりうると考えられる。

そこで本研究では、生きる「知恵」という観点から教材を捉え直し、テキストに描かれている生きる「知恵」と、それに対する児童の出会いを明らかにすることを目的とする。なお、本研究は、生きる「知恵」を直接的に指導することを意図するものではなく、教師が児童の読みの広がりや可能性を見通すための一つの視点を提示しようとするものである。

2. 小学校説明的文章に見られる多様な生きる「知恵」

3社の説明的文章教材に見られる生きる「知恵」を分類した結果、各教材に描かれている生きる「知恵」は、まずその主体が「動物・植物」であるか「人間」であるかによって大きく分けられた。さらに、生きる「知恵」の主体が人間である場合、その生きる「知恵」が具体的な生活上の工夫に向けられたものか、社会の在り方や個人の生き方に向けられたものかに整理できた。以上のことを踏まえ、教材に見られる生きる「知恵」を以下の3つに大分類した。

- ① 生存戦略の知恵（主体：動植物／内容：生き延びる「知恵」）
- ② 生活に関する知恵（主体：人間／内容：技術・人に伝える・生活を豊かにする「知恵」）
- ③ 社会生活・人生に関する知恵（主体：人間／内容：他者と生きる・文化をつなぐ・人生を豊かにする「知恵」）

「生存戦略の知恵」とは、動物や植物が厳しい自然環境の中で生き延び、種を次の世代へつないでいくために働かせている本能的、あるいは生態的な工夫のことである。「たんぼのちえ」が具体的な教材例として挙げられる。「生活に関する知恵」とは、主体が人間であり、日々の生活をより良いものにするため工夫のことである。「じどう車くらべ」「すがたをかえる大豆」が具体的な教材例として挙げられる。「社会生活・人生に関する知恵」とは、高学年段階の教材に多く見られ、より広く抽象的な社会生活・人生に関する「知恵」のことである。「固有種が教えてくれること」や「「弱いロボット」だからできること」が具体的な教材例として挙げられる。これらの生きる「知恵」は学年を追うごとに①の教材から③の教材へと増えていき、「個」の視点から身の回りの生活、そして「個」や社会の未来へと広がりを見せていることが確認できた。

3. 授業実践

本実践は、「文化を受け継ぐ」ことについて考えをもつことを目標とし、中心教材『和の文化を受けつぐ』（東京書籍・5年）に加え、『未来につなぐ工芸品』（光村図書・4年）および『世界にはこる和紙』（光村図書・4年）を重ね読みの教材として授業を行った。

本研究では、児童が学習を通してこれらの教材に出会い、職人の工夫や未来へつないでいくという視点から、どのような生きる「知恵」に出会っていくかに焦点を当てた。

その結果、本実践を通して児童が出会った生きる「知恵」は、児童の発言や記述の内容から大きく以下の2つに整理することができた。まず、「文化を変容させながら守り進化させる知恵」である。職人の苦労や工夫に対する共感的な反応が見られ、「文化を変容させながら守り進化させる知恵」の理解の入り口に立つ様子が見られた。一方で、その多くは「すごい」「大変そうだ」といった感情的な共感にとどまり、「守りながら変える」という中心的な部分までは十分に理解させることができなかった。次に、「文化を支え手として守る知恵」である。これが本実践における最大の成果と言える。文化を受け継ぐということについて、導入時には具体的なイメージをもてなかった児童が、単元末には「食べてみたい」「広めたい」と記述するようになり、文化を受け継ぐ主体を職人だけでなく、消費者である自分たちへと広げて捉えるようになったことがうかがえた。

4. 研究の成果と課題

本研究の成果としては、まず3社の説明的文章教材を生きる「知恵」の観点から教材研究を行い、そこに見られる「知恵」を指摘するとともに、それらの生きる「知恵」を分類し整理できた点である。次に成果として、実習校で行った『和の文化を受けつぐ』（東京書籍・小5）の研究授業から、教材に見られる、どのような生きる「知恵」に出会うことになったのかを明らかにすることができた点が挙げられる。

一方で課題として、児童が教材に見られる生きる「知恵」に出会った際に、教師がどのようにその反応を拾い、より深い読みへとつなげていくかという点が残った。また、「知恵」そのものは学習課題にはなり得ないため、教材の特性に応じた学習課題を設定する授業構成力を今後さらに高めていく必要がある。